
Blue;HEAd

ケーシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue ; Head

【Nコード】

N2165Y

【作者名】

ケーシン

【あらすじ】

麻帆良学園女子中等部2・Aに転入することになった青春中毒・諦観系男子中学生の話。

身体は東で経歴は西、心は中立の主人公。
でも色々と巻き込まれる。何が悪いって、転入したクラスが悪かった。仕方がないから今日も諦め、青春探して奔走する。

以下注意事項

大規模な原作ブレイクはしないけど、イベントの半分くらいはオ

リジナル

アンチが読みたい方、主人公無双が読みたい方にはオススメできません

作者の知識は偉大なる先駆者様たちの作品から得ています

二次創作初心者なのであしからず

それでもOKな方はどうぞ。

001・青春を探そうの会、会員たちは今日も（前書き）

「ネギま！」の二次創作を読みたいけど、「テンプレ転生 オリ主 最強無双 ハーレム」という展開は飽きてしまったという方にオスメ……になるといいんだけど、結局は作者の力量次第なわけで。ぶっちゃけ作者は上記の感じな人だから、そういう人にも楽しんでもらえるように作っていくつもりです。

001・青春を探そうの会、会員たちは今日も

三月上旬、放課後の同好会室にて。

僕たち「青春を探そうの会」のメンバーは集まり、同好会唯一の三年生であり、今月をもって中学を卒業するマヒル先輩の送別会を行なうことになった。

つまりは、現在、送別会の真つ最中だったりするわけで。

「俺の門出を祝って、乾杯！」

この場合、主賓が乾杯の音頭をとるのは果たして正しいことなのだろうか。なんて疑問は頭の片隅に放置。

せっかく買ってきた炭酸ジュースを振りに振りまくって部屋中よごしまくっている某M先輩も放置。コンビニで買うのに身分証の提示が求められる場合がある、高価な液体の匂いが混じっている気もするけど放置。

掃除はみんなで行きましょう。

主賓？ 知らないよそんなの。

僕も「乾杯」といって、黒い液体が入っている三百五十ミリリットルの赤い缶に口をつける。黒蜜にあらず。イメージ的には、がぶ飲みすると同じくらい身体に悪そうな飲み物だけど、こっちは骨までしみてボロボロになってしまいそう。

それはともかく、普通「乾杯」って「合唱」みたいになるものじゃないんだろっか。

僕たちの「乾杯」は見事な「斉唱」。

そっちの方が僕たちらしいけどさ。

とりあえず一緒にいるだけで、向いている方角はバラバラ。目指すものは同じはずなのに。正しい道かも確かめないままに独走してる。でも、一緒にいる。

たぶん、この空気が心地良いんだと思う。

マヒル先輩もサバサバも、自分勝手に進んで自分勝手に他人を巻き込んで自分勝手に迷惑をかける。けど、決して内側まで踏み込んでこないし、踏み込ませない人たちだから。

こんなことを考えているのは僕だけで、このことをみんなに話せば笑われてしまうだろう。

けどさ。

少しくらい、いいじゃないか。

だってこの場所はもうすぐなくなってしまうのだから。

「エリイに隙あり！」

「え！？」

二方向からの同時攻撃により、エリイこと僕、弾場江利は砂糖過多の海へと沈んだのでした。

めでたし、めでたし。

「さらばだエリイ、君のことは忘れないぜ」

妙に恰好つけて去っていく爆弾魔^{ジュース}。

サバサバはいつもみたいに目隠しでカップ麺を作ろうとして火傷しているみたいだし。

何がいけなかったのかって、まずあなたの思考回路がいけないと思います。「カップ麺＝青春」の等式が成り立つあなたの頭の中がそもそもの問題なんです。

「『お前なんとかしろよ』みたいな目で見られても……」

かの有名な麻帆良学園女子中等部1-Aの一員であるサバサバは、はつきりいつて超がつくほどの美少女だ。そんなサバサバに冷たい目で見られると、なんだか僕が悪いような気持ちになってしまう。

けど、僕のせいじゃないよね？

机の上のカップ麺の残骸&お湯はサバサバだし、その他は爆弾魔のせいだし。

このカオスをどう收拾しろと……。

「あー、もう！ メンドくさい！！」

そうして僕は爆弾魔にジョブチェンジした。
脈絡がない？ 知らないよそんなの。

激しい銃撃戦だった。

ノルマンディーさんは結構平気な顔をしていたが、一個小隊に満たない僕たちからすれば、死戦ともいうべき闘争だった。

特筆すべきはマヒル隊長らによる二段構えの戦法だろう。ひとりがプルタブを弾き、敵を圧倒し、目くらましの役割を果たす。もうひとりはその間に缶を振って弾を装填、相棒が弾切れになったところで発射。攻めに転じようとしていた敵の、がらあきになった急所

をねらう。攻撃は最大の防御。大技を放った後の硬直時間を味方がカバーするという、格闘ゲームにも通ずる、古来より伝わる戦法。

長篠くんも真っ青だったはずだ。

他方に目を向ければ、片手でプルタブを開ける技能を隠し持っていたサバサバの立ち回りは圧巻の一言であろう。二刀流ならぬ二缶流は僕らの度肝を抜いた。

目隠しでカップ麺を作る器用さ（成功率30％）は伊達ではない。

孤軍奮闘した僕たちだったが、残弾数の問題で戦略的撤退をせねばならなかった。

「やりきったぜ」

マヒル先輩は甘い海に沈み、満足そうだった。

「……………」

サバサバは戦いの爪跡を、いつそ冷徹さを含んだ瞳に映していた。いつだって悲しみや虚しさは僕らの心に付き纏うものだ。それが闘争者の宿命。

彼女の古くからの戦友であった携帯用小型ガスコンロくんは重症を負い、電気ポットくんは戦死……。

前々から不調を訴えてはいたのだ。

僕もサバサバも、そんな状態にあった彼を無理に戦地に送り込む

ような真似はしたくなかった。

けれど戦況はそれを許さなかった。

目前に迫った前線。守るべき者たちの存在。電気機器としての矜持。そして、自分こそがサバサバの相棒なんだというプライド。

……ベッドに横たわっていることは、できなかったのだろう。

戦友を失ったのはサバサバだけではない。

「諭吉……英世……」

僕の諭吉が溺死した。レシートに抱かれた彼はいつもと変わらぬ表情をしていて、それが余計にくやしくて。

英世は三人も昇天された。無駄死にだった。割り勘の弾代と戦闘服の整備代^{クリーニング}だった。

「青春って、なんだろうーな」

「アヒルくせに偉そー、たそがれている暇があるならさっさと片付けろあほ」

今日も今日とてサバサバの毒舌（？）は絶好調。ポットを壊されて機嫌が悪いのだろう。ちなみに「アヒル」というのはマヒル先輩のあだ名みたいなもの。マヒル先輩はアヒルが好きらしく、アヒルのストラップをじゃらじゃらさせていたりする。右耳に光るアヒルピアスは、ちょっとどうかと思う。

さつきマヒル先輩にポットを弁償してもらおうと、サバサバが力ツアゲを試みていたけど、がま口ならぬアヒル口の小銭入れを渡されていた。

「いやー、昨日英世に愛想つかされちゃって」「……悪趣味」

という噛み合わない会話があたりなかったり。

サバサバは二重の意味で嫌な顔をしていた。

ちなみに、僕の英世さんがまたひとり一時的に拉致されて財布から去っていつてしまったのは言うまでもないことである。割り勘の話はどこへ行ったのだろう。事後報告はいけないと思います。

床をごしごし、窓をふきふき。

時折マヒル先輩がぶつぶつ不満を垂れて、サバサバが律儀につっこむ。嫌な顔してばかり、嫌な顔大会開いちゃってるメンツで大掃除。

そんな平和な夕刻。

これが青春なのかはよく分からないけれど、なんとなく大切だっと思う。

時間を無駄にして、金を無駄にして。

自分が立っている場所の価値すら知らなくて。
でも。

遠い未来から現在を振り返ったときに、あのとき自分は「生きていたんだって、そんな風に思えるような今なんじゃないかなって思う。僕にとつての青春はそんな感じだから、僕はこの部屋の扉を叩いたんだと思う。」

「アヒル、窓はちゃんと棧さんまで拭く」

「細けえな。年末の大掃除じゃないんだから」

文句をいいながらも棧を丁寧^{さん}に拭くマヒル先輩。この人なんだかんだ言つてサバサバを可愛がってるから強く出れないんだよね。で

もそれ以上に、ドがつくほどのシスコンで、救えないらしいけど。

「年度末のおーそーじ」

「……うまくないよ、サバサバ」

ちよつとだけ得意顔をしていたサバサバに突っ込まざるをえなかった。本人は僕の意見をガン無視する方針のよう。ちよつと悲しい。

「しかし、サバサバがここまで掃除にこだわるとは、ちよつと意外だったな」

ちようと窓を一通り拭き終えたところでマヒル先輩が言った。確かに、僕もその意見には同意。

「こだわりはないけど、出て行くときは綺麗がいいから。もう一ヶ月もないし」

「は？」

マヒル先輩は困惑した顔を見せ、

「俺はともかく、お前らはまだまだここ使っただろ？ 出て行くって、なんだよそれ」

「うっん、私は同好会をやめないよ」

生まれそうになった認識の齟齬にサバサバは即座に対応した。けれど、一瞬だけ僕のほうに視線を向けた彼女は、そこから先を言いよどんでしまう。

そこで僕は彼女の意図に気づいた。

やめたいわけじゃない……。

僕だって同じ。でも無理なんだ。

だからガラにもなくなためらうサバサバに代わって、

「この同好会は今月をもって解散します」

それはマヒル先輩抜きで話し合っ出て結論だった。

規則の緩い麻帆良では、所属する生徒が同じ学校の生徒のみの場合、同好会の設立に必要な最低人数は二名だ。しかしさすがに学校を越えて設立する場合の最低人数が二名というわけにはいかないらしく、三名となっている。むしろ、基本的には最低三名以上必要なのところを、同校の生徒のみならオマケで二名にしてくれているというのが正確な同好会法成立の経緯だろう。

当たり前のことであるが、女子校に通うサバサバと男子校に通う僕とは学校が違う。

マヒル先輩が卒業していなくなれば、三名の定員を割ってしまう。その場合、新しく同好会に入ってくれる人員を獲得しなければ、同好会は解散、この部屋は僕たちの手を離れる。

この場所は僕たちだけの聖域だった。

僕たち以外の人間に踏み込ませる気は、ない。

「知ってますか先輩。三名って三人分の名前が必要って意味なんですよ」

「だからそれがなんだって」

「同好会の最低定員は三名です」

僕たちだけの聖域の、僕たちだけの青春。

大人にも子どもにも見えない、僕たちだけの、ひとりよがりなりアルだから。

いつだって現実っていう壁は無表情に僕らを阻む。その壁に沿ってレールが走っていて、僕にはその上を進むことしかできない。

冷酷とか残酷とか言えるほど悲劇じゃない。この出来事を嘆けないくらいには、僕は悲劇ってやつが大嫌いだった。

ちょっとだけしんみりする。

でもすぐにそんなシリアスな空気はマヒル先輩が吹き飛ばしてくれる。

だってこの人は爆弾魔だから。

「そっか、そうだよな。最低三名だったな」

「はい」

「学校を越えて設立する場合、三名だったよな」

わざわざ言い直したマヒル先輩に嫌な予感。

爆破された壁の破片は、僕にふりかかることもしばしば。

「確か、もうひとつ、定員に関する条項があったような気がする」

わざとらしく結論を先延ばしにしてニヤニヤと僕を見下ろすマヒル先輩。彼の言いたいことを予想できてしまった自分が嫌になる。
できるのか？

……できるんだろーな、この人なら。

「アヒル先輩としてはナイスアイデア」

「だろ？」

「今日一日は先輩って呼んであげる」

不機嫌だったはずのサバサバの笑顔を視界の端に捉えて、もう僕は白旗を上げるしかなかった。

001・青春を探そうの会、会員たちは今日も（後書き）

いかがでしたでしょうか。

……とか偉そうに言えるほど文字数書いていないわけですが、主人公が2-Aに転入するきっかけはこんな感じ、ということで、第一話でした。

感想は気軽にお願いします。

感想を書く……。

作者が喜びます。二次創作にかまけて学業をおろそかにします。学力が下がります。日本人の平均学力が10のマイナス8乗くらい下がります。大多数の人の学力が相対的にアップ!? つまり受験生にオススメ。四捨五入は恐ろしい兵器です。

冗談はさておき、作者の脳内は な感じなんで、ときどきエリイくんも迷走すると思います。

それでもOKな方は今後よろしくお願いします。

002：ハーレムイベント（笑）

春休み。

小説にすれば上下巻、映画なら二時間のアニメ映画にできるほどの「アヒルvs麻帆良大妖怪」の戦いがあつたとかなかったとか（サバサバ談）。

一年ぶりの里帰りをしていた僕の知らない間に事態はかなり進んでいたらしく、始業式の前々日に麻帆良に帰ってきたときにはもう取り返しのつかないことになっていた。

具体的には、男子寮から僕の居場所が消滅していたのが、まず一点。部屋にあつたはずの私物は綺麗さっぱり消えているし、そこそこのいい関係を築いていたはずのルームメイトには「なんでお前がいるの？」みたいな目を向けられるし、その他大多数の男子生徒からは親の敵みたいに見られた。

いや、知らないわけじゃなかった。

知っていたさ。

だつて九月くらいに募集要項配られたもん。すぐ資源ごみに出したけど。

「男女共学化のためのテストケース」

……だつたと思う。

詳しい内容は省くけど、麻帆良学園女子中等部二学年の各クラスにひとりずつ男子を放り込んで観察をするという企画だ。なんでも五、六年に一回くらいのペースで行なわれる名物イベントらしい。毎回なにかしらの問題が起こって共学化が白紙に戻ってしまうのに、こりもせず行なわれるから「ハーレムイベント（笑）」などと不本意な名称で呼ばれることもしばしば。ちなみに2-Aの担任である

ダンディおじさん高畑先生も、テストケースの被験者なんだとか。
で、僕の学年でちょうどそのテストが行なわれるらしくて。
見事、「当選」したらしい。

僕は申し込みをしていないはずんだけどな……。

十中八九マヒル先輩の仕業だろうけど。

だって僕の行くことになった2-Aには、もうひとり男子生徒が入ることになっている。つまり、僕とそいつで計二名。各クラス一名つて要項に書いてあるはずなのに。

サバサバは、「アヒルと麻帆良大妖怪がバトルした」って言うってたけど、妖怪つて学園長のことだよな。学園長に直訴できて、さらには申し込みすらしていない僕をテストケースにねじ込んでしまうマヒル先輩つて、一体何者なんだ。

居場所のなくなった男子寮にいた間は、「なんで弾場が……」とか「俺のハーレム計画……」とか、そんな低くて小さな声がいたるところから聞こえてきて、正直怖かった。

うん。僕が「マヒル先輩爆発しろ」と思ったのは言うまでもない。むしろ屋上で叫んだ。そしたら「リア充爆発しろ」との合唱が返ってきた。残された寮生たちの心の叫びだった。無駄にそろっていた。いつ練習したんだあいつら。

と、いうか。マヒル先輩。

なんでよりによって美少女ばかりの2-Aに行くことになっているんですか。しかもなんでそのこと寮のみんなにバラすんですか。サバサバと同じクラスだし、知り合いもいるから、他のクラスに突っ込まれるよりは馴染めるかもしれないですけど。それでも2-Aはないです。恨まれ方がハンパないです。テストケースに「当選」した、僕と同じ境遇の人たちからすら恨まれるってなんですか。恨みますよ。

……陰陽師ではない僕の怨念が通じたのかは定かではないが、マヒル先輩は籍が男子高等部に移ったその日に退学届けを出して、一日も登校することなく高校中退の最終学歴を得たらしい。

現在はリアル自宅警備員。

警備の場合は週一で深夜のコンビニに移るとのことだが、志望動機が「某少年誌のフラゲのため」って、よく面接通ったな、おい。というかコンビニってフラゲできるのだろうか。マヒル先輩本人に聞いても「知らん。フィーリングだ」とか意味不明な返答をいただけるだけであつた。大丈夫なのか、あの人。本屋でバイトしろと思わなくもない。

ちなみに。

この時期を境に、深夜のコンビニでバイトをしている大学生が「可愛いんだけど、カップ麺にお湯を注ぎすぎてポットコーナーのまわりを水びたしにする中学生くらいの女の子がいる。片付けるこちらの身にもなつてほしい」という愚痴をこぼすことがなくなったという話があつたりする。

そんなこんなで始業式。

幸運にもテストケースの被験者に選ばれた男子生徒二十余名プラス僕は、二千人を超える女子生徒の集団が整列する、その脇の小スペースに肩身の狭い思いをしながら（そう思っていたのは僕だけだったのかもしれない）、並んでいた。

新入生のうち、中等部からの転入組が某ぬらりひょん先生の後頭部の長さにざわつくなんて恒例行事もこなしながら、無事に閉式となった。

その後、各々のクラスに移動していく女子生徒の大群のかたわら、二年の学年主任である新田先生に引率され、特別教室棟にある教室に移動した。そこで諸注意が書かれた冊子を受け取り、一時間ほどその冊子を片手に注意事項に関する話を聞いて、いよいよ教室に向かうことになった。

……のだが。

ほぼすべての男子生徒が、教室内でホームルームを行なっていた担任教師に任せられていくのに対して、なぜかA組の前だけは素通り。

そのまま新田先生に連れられて、廊下を歩いていく。

確か、この先には応接室や学園長室があつたはず。

残つたのは僕と男子生徒（かなりのイケメン）がひとり。A組以外に転入することになった生徒はみんな、もうクラスの輪の中だ。

隣の男子生徒は涼しい顔をしているが、彼はこうなることを知っていたのだろうか。正規の手続きを踏んでいない僕は、彼とは対照的に内心ハラハラしまくっていた。学園長室で学園長直々に糾弾とか、僕のチキンハートには洒落にならない。

マヒル先輩だけじゃなくて、学園長にも呪いの電波を送っておくべきだったのだろうか。でも、相手はぬらりひょんだから効果は薄いかもしれない。実際に効果があつたら、それはそれでやばい。戦争の火種というかなりヘヴィな副産物ができるから。

大前提として僕は陰陽師じゃないというオチ。

精神安定剤の錬成にかなりたくさんの対価を支払った気がする。

温度とか。

で、いつの間にか学園長室の前にいるわけで。

「学園長、今日付で二年A組に転入する、神海^{こうみ}レイジと弾場江利の両名をお連れしました」

新田先生が扉に向かってそう言うのと、「ご苦労じゃった」との学園長の返答。

イケメンは「コーミ」というのか。
珍しい名字、初めて聞いた。

新田先生はイケメンと僕に一声ずつ励ましの言葉をかけてから職員室に帰っていった。
厳しい人という印象しかなかったけど、意外と生徒想いの教師なのかもしれない。

イケメンは僕を一瞥して鼻を鳴らした後、物怖じせず学園長室に入った。イケメンの態度にむかついた僕は、イケメンが開けた扉をあえて一度閉めてから蹴破って学園長室に入ったりはせず、粛々とイケメンの後に続いた。

そんな冷めた目で見んなよ。

「ふおおおお、よく来たのう二人とも」

好々爺のように笑う学園長。その笑顔の裏で、一瞬にしてこの部屋に結界を張るあたり、油断ならない人物である。

学園長の斜め後ろに控えた高畑先生は、微笑してイケメンに小さく手を振っていた。おい。それは公私混同じゃないのか？

イケメンも関係者なのかよ。

……まあいいや。

しかし、なんだそっちか、と安心する。

どうやら僕は糾弾されるために呼ばれたわけではないらしい。

「楽しんでくれて構わんぞい」

僕は休めの姿勢。

イケメンはなぜか髪をかきあげた。……なんでよ？ 様になって
いるのが憎らしい。高畑先生も苦笑するくらいなら突っ込めばいい
のに。

「気づいておるとは思うが、ワシが呼んだのは魔法生徒としての君
らじゃ」

ふざけてんのかこのぬらりひょんは。

「ふお!？」

ぬらりひょんが驚く。

あ、やば。そういえばマヒル先輩に言われてたっけ。ぬらりひょ
んは読心術が得意なぬらりひょんだから気をつけろって。ぬらりひ
ょん^{あなじ}侮りがたし。

「……………」

「どうかしましたか、学園長」

「いや、なんでもないぞい。ところで弾場くん、協会からの連絡は
届いておらぬか？」

「僕の方には何も」

「そうじゃったか……。うむ。時間もないし、まずは紹介からはじ
めようかのう。こちらがA組の担任の、高畑・T・タカミチ先生じ
や。NGO団体『悠久の風』にも所属されておる」

渋さが五十パーセントアップ（当社比）してるな、最後に会った
時より。

「はじめまして、江利くん。レイジくんは久しぶり」
「お久しぶりです、タカミチさん」

イケメンの豹変振りに驚く。なんだこいつ、いきなり無垢な少年っぽいキャラになったぞ。さっきの髪かきあげキャラはどこに行ったんだ。

でも突っ込まない。そんな空気じゃない。

そんな琐事よりも僕はどうするべきなんだろう。一応、高畑先生と僕は初対面なんだよね。でも「はじめまして」って言うのはベミヨーだし。

とりあえず会釈。

「……ども」

なんかすごく無愛想になってしまった気がする。

「そして、同じく『悠久の風』所属の、神海レイジくん」

学園長の説明に納得。つまりイケメンは高畑先生の後輩なわけね。……そのイケメンは髪をかきあげるな。

「よろしくしてあげようじゃないか。弾場くんだっけ」
「弾場江利、関西呪術協会所属だ。よろしく」

差し出された右手を取る。

こんなところで握力勝負をする気はないのですぐに離れたが。ちよっとそこ、残念そうな顔をしない。僕は非力なの。てか、ウザイケメンなのか熱血少年なのか、キャラぶれてんじゃないよ。

「紹介も終わったところで、弾場くん」

「はい」

「君には今日付で魔法生徒として活動をしてもらうことになった。引越しのごたごたで連絡が遅れてしまっているようじゃが、これは協会も了承済みのことじゃ」

「はぁ……」

「ワシらとしても、一般生徒として入学したとはいえ、西に所属する者をただ放置するわけにもいなくてのう」

……そういうことか。

僕もそう長くは「普通の」学生生活を送れるなんて思っではないなかつたけど、一年が限度だったか。嘆いても仕方ない。遅かれ早かれこうなることは、分かっていたことだし。

「警備に入ってもらうのは来週からじゃ。それまでには確認をしておくのじゃぞ」

「はい」

「……それで、ここからが本題なのじゃが」

学園長は一拍置き、

「神海くんと弾場くんにはペアで活動してもらうことになった」

この流れなら普通そう来るわな。

そのイケメンが「な!？」とか効果音付きで驚いている理由が分からない。

「学園長!？ 俺にこのエセ外国人と組めとおっしゃるのですか」

うわー。その本音は聞きたくなかった。

エセ外国人って何さ。僕はれっきとしたハーフだ。髪を黒に染めて、目にも黒のカラーコンタクト入れてるから、エセっぽく見えるかもしれないけど。

それにエセ外国人だからチーム組めないって理解が追いつかないんだけど。西の人間にはそういう奴もいるけども。イケメンは東…というか世界のフィールドで活動するNGO所属のはずだろ。

それと、本当にどうでもいいことだけど、一人称俺なのね。イケメンだし、私とか僕とかだと思った。それが我輩か。

あ、想像したら笑えてきた。

イケメンが髪かきあげながら「我輩は……」って。

「ぶ」

いや、今の僕じゃないからね。
うつむいてる学園長だから。

「き、決まったことは、決まったことじゃ。決定は覆らん」
「しかし……!!」

「ぎ、逆に、聞くが、神海くんは何が不満なんじゃ？」

あー、耐えてる耐えてる。

「俺は、」

（我輩は、）

「ぶ」

僕の脳内補完でまたしても吹き出しそうになる学園長。
読心術やめればいいのに。

「学園長？」

「な、なんでもないぞい。続けてくれい」

「……俺は、西に所属している弾場を、背中を預けるほど信用することはできません」

不信感を表しながら続けるイケメン、……コーミ。誰に対する不信感かは言うまでもないだろう。

コーミの言葉を補うなら「西に所属しているくせに、外国人の血が入っている弾場は」となるだろう。極論を言ってしまうば、西洋魔術師を目の敵にしている関西呪術協会にとって、外人というのはすなわち排除すべき敵。それだけに、外からは僕が存在がすごくチグハグに見えるらしい。

「そうは言ってもものう、弾場くと組む適任者が神海くんくらいしかいないのじゃよ。神海くんは正式には東の所属ではないし、使う術も西洋魔術ではないと聞く。弾場くんが敵対する理由はないのじやよ」

「確かにそうかもしれませんが……」

「分かつてはくれぬか？」

結局、その問いにコーミが頷くことはなかった。

高畑先生は出張から帰ってきたばかりで、学園長への報告などがあるらしく、コーミと僕は一足先に学園長室を辞して廊下で待つことになった。

気まずいと思っているのはどうやら僕だけのようで。

コーミは裏の関係の話が終わった途端、イケメンに変わった。精神がイケメン（笑）なのだ。二重人格を疑うくらいに。

「弾場くんも運が悪い。この俺と同じクラスになったのが運の尽きだったな」

高笑いを始めるイケメン。

「わーはっは、て。何その笑い方。」

そんなに髪かきあげていたら、前髪にだけダメージがちょっとずつ溜まっていつて中年になったときに生え際の後退スピードが上がると……なんて事実があるかどうかは別にして、とりあえずそっちの方が面白そうなので、そうなることを願った。

ただし僕は陰陽師以下略。

「キミもせいぜい頑張りたまえ」

「せんせー。イケメンの言ってることが分かりませーん。僕は一体何を頑張ればいいのですかー」。

「ハーレム計画？ ああ、納得。」

「いや、僕は作らないよ。というか作れないし。」

問題を起こさなきゃいいけど、彼。むしろイケメンはイケメンだから、問題を起こすところまでたどり着けなかったりするのだろうか。

「まあ、誰一人渡さないが」

現実を見ようよ。

「A組は俺のものだ」

イケメンが一匹、バカが一匹、アホが一匹、変質者が一匹。
おまわりさんこっちはです。とりあえず、のべ四匹捕まえてください。

おまわりさんの代わりに高畑先生がやってきて、イケメンが半分以上くらい後輩モードになった。イケメンは後輩なのでトコトコ歩く。高畑先生は親鳥だ。それはともかくイケメンはイケメンなのでこんなことをしてはいけないと思います。現行犯逮捕できないのは社会の損失です。

……うん、バカは僕のほうだった。
ただし僕は以下略。おまわりさんがやってこないのも、うなづける。

意味不明？ 僕もどこに行きたいのか自分でも分からない。

「この階段を使うと職員室があるから。困ったことがあったらいつでも相談に来てね」

丁寧な説明恐れ入ります、高畑先生。
でもあなた出張ばかりで滅多にいないはずでしょ、なんて野暮なことは言わない。社交辞令のようなものなんだろうし。

僕は高畑先生に連れられて、行きたいかどうかはともかく、3 - Aの教室に向かっているわけだ。

廊下が長い。一学年二十クラス以上あるから仕方ない、諦めが肝心。そこから三分ほど歩いてやっと到着。そりゃ、職員室からそんなに距離があるわけないか。

ちよつとだけ開いたドアから聞こえてくる、わいわいきゃっきやと騒がしい声。

わー。すごくワクワクしない。

苦笑しながらドアを開けようと手を伸ばした高畑先生。しかし直前でイケメンがそれを制止する。

「ここは、俺が」

その恰好つけは必要ないと思う。

紳士っぽく言ってるけどやってること全然違うから。

というか気づけ。上を見る。……やっぱ見るな。直進しろ。

ただし以下略。なんかもう色々とアレだ、原型がない。それでも願いは聞き届けられ、イケメンは待ち構えるトラップにチャレンジしていった！

結果、全弾命中。

加害者さんたち歓声上げてるけど、それあなたたちのターゲット違うから。転入生だから。

高畑先生と僕は廊下でその様子を見ていた。

苦笑しているくらいならフォロワーしてあげたらどうですか。もしかしてこれが「悠久の風」の教育方針なんですか。

確かに、あれがかわせないのはちよつと問題だけ。

でも、落下してきた金ダライを頭で受け止めて、そのままバランスを保ってるのはすごいと思う。けど、それ必要なの？ 僕には真似できない。シュールすぎる。てかなんで髪かきあげる動作したのに金ダライが落ちないの。神秘だわ。

二人、廊下に立ち止まって教室に入りあぐねていると、イケメン（＋水＋チヨークの粉＋頬と額におもちやの矢）が教卓を叩いた。かなり大きな音がして教室が静まる。だけど金ダライは落ちない。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ、それでも生きるとは劇的だ！」

有言実行で劇的なイケメン。

それでも金ダライを落とさないイケメン。

やりきった……って顔をしているイケメン。

生きることは劇的だね。分かるよ。でもそれこのメンツ前にして言うことじゃない。現在進行形であんたの生を劇的にしてるのはA組の生徒だから。

あと、その顔は弾幕をかわせるようになってからしてほしかった。高畑先生と僕の心がひとつになった瞬間、だったはず。

髪をかきあげようとして、ちょっと恰好つけすぎて金ダライに手が当たり、結局落としてしまうイケメン。なんか煮え切らない。せっかくならそのままでいろよ。

金ダライが床に転がって、がらん、と特有の音を立て。

A組の時間が流れ出す。

途端に騒がしくなる教室内。

やっと室内に入っていく高畑先生。

僕もそれに続くべきなのか迷ったけど、迷ってる間にタイミングを逃して廊下に取り残されてしまった。
帰ろうかな。

「はいはい、みんな静かにー」

高畑先生の一声で、だんだんとボリウムが下がっていく。しかし完全に静かになるまで一分近くもかかった。さすがはA組。

「話は聞いていると思うけど、A組には二人の転入生が来ることになりました」

いえーい、どんどん、ぱふぱふー。

最初のはともかく後の二つはどこで鳴ったんだ？

「一人目が、こちらの彼、神海レイジくん」

イケメンはそれをやめなさい。内容はもう面倒だから言わない。
というか仮にも高畑先生はあんたの先輩だろ。なんで黒板に自分の名前書かせてるんだよ。自分で書けよ。

高畑先生が「『こうみ』ってどういう字だっけ」とチョークを持ったまま思案する。でも結局思いつかなかったようで、ふりかえって尋ねようとした、ちょうどその時、

「お前！」

とイケメンが声を上げた。険しい顔をして、右手で誰かを指し示している。

廊下からではよく見えない。

そっと教室内をのぞいて見ると、

「……サバサバ？」

最後列、金髪少女の隣に座っているサバサバを振り返っている生徒が多数。我関せずの態度を貫く生徒も数名。ちなみにサバサバもそのひとりで、眠たげな目をしている。

……サバサバ、キミが事件の中心人物っぽいよ。

あ、サバサバの目がぱっちりした。

僕に気づいた様子。先にイケメンに気づくべきだろう。教卓を指さす。じじじ、と、半開きの目だけが動く。再びぱっちり。やっとイケメンの存在に気づいたみたい。

「お、お前！」

どうやらテイク2をやってくれるらしい。唐突に始まったテイク2だったが、ほとんどの生徒が即座に対応。

みんなの温かさに感謝だよ本当に。

こてん、とサバサバが首を傾げる。

状況が理解できないらしい。

「……転生者、か？」

さっきまでとは打って変わって、ゆっくりと息をはきだすような、慎重なイケメンの声。

周りの誰一人、イケメンについていけなかった。「てんせーしゃ、って何のこと？ な空気が流れる。でも誰一人、口を挟まなかった。」

二人の間には周りには分からない何かがあるのだと信じて。

「あ、あなたは！」

ついにサバサバの返答。

空気が引き締まる。緊張の一瞬。期待が膨らむ。

「……ぶ、ぶ、仏教の勧誘はおこ、おこお断りです」

沈黙。

なんかもう、僕は出ていかざるをえなかった。

「サバサバ、もういい。もう頑張らなくていいだ。楽になってもいいんだよ」

サバサバは半開きだった目を、ついに完全に閉じた。

彼女が何を得て何を失ったのか、それはきつと彼女にしか分からない。

それから一時間は怒涛の質問タイムだった。

転入生であるはずの僕が、サバサバのことをいきなりサバサバとあだ名で呼んでしまったのがいけなかったらしい。僕とサバサバの関係について根掘り葉掘り聞かれた。ツインアホ毛センサーを持った生き物が「ラブ臭」とうるさかったけど、僕とサバサバはそんな関係じゃない。でも、こういうものはどれだけ本人が否定しても無駄なもので、翌日には某パパラッチが号外を発行したとかしなかったとか。

イケメンもイケメンだけあって色々と質問を受けているみたいだったけど、どこか調子悪そうだった。

元気出そうぜ。

最後まで、誰一人として彼の「転生者」発言に触れなかったのは優しさゆえか、自分たちには荷が重いと判断してのことか。

なにはともあれ。

そんな感じで登校一日目は幕を閉じる。

はずだったのだが……。

002・ハーレムイベント（笑）（後書き）

イケメンのあの台詞は「めだかボックス」より。
イケメンくんにはテンプレでいてほしいという作者の願いが込められています。

003・苗くんと仲間な愉快たち

「神海くんも弾場くんも転入のことで色々あつて疲れているだろうから、今日のところはそのくらいにしておきなさい」という旨の高畑先生のお言葉があり、質問攻めから解放されて、はや一時間。ちょうど昼食時である。

で、僕はその昼食時を早速クラスメイトの女の子と過ごしているわけだ。

僕の手が早いわけではない。

古くからの知り合いだったってだけで。いわゆる幼なじみ。

「えーくん、どないしたん？ そんな仏さまみたいな顔して」

「……ちゃんと頂^{いただき}つてつけようよ。そうじゃないと僕は、二回までしか許さない人になっちゃうよ」

「それは困るな」

からからと笑う僕の幼なじみさん。具体的にはぬらりひよんの孫でも人間。和服が似合う京美人。でもミニス力制服。知らない間にとびきりの美少女になっていたんですけど、近衛木乃香さん。

えーくんこと僕は教室から出て行こうとしたところで、捕獲されてしまったわけです。木乃香の背後には鬼が見えた。デフォルメされていて二頭身だった。頬を膨らませて微笑ましかったです。見慣れていますから。

そしてちょうど昼食の時間だったために喫茶店へゴー。

触覚のようなアホ毛センサーを頭部に持つ早乙女、略してアホ女（もしくはアホセンサー）が「ラブ臭」と反応したせいで黄色い歓声上がるし。

イケメンには睨まれるし。「よくも俺の木乃香を……」って、木

乃香はお前のものじゃないから。というかもう呼び捨てなのね。転入初日で初対面のクラスメイトの名前覚えてるのはすごいと思うけど。

そしてパパラッチ朝倉のニヤニヤ笑いには寒気しか感じなかった。「二股」「修羅場」という不穏な単語は僕の聞き間違いであることを祈りたい。転入早々二股男のレッテル貼られるのはキツ過ぎる。ただでさえ女子ばかりなんだから、そんなことになったら学校が地獄だ。僕は女の子と付き合ったことすらないのに。

未来のことを憂えていても仕方ない。
それより現在のことだ。

木乃香は眩しすぎるくらいの笑顔を僕に向けている。さっきからずっと世間話ばかりをしているのだが、そんな話をするためにわざわざ僕をここに連れてきたわけじゃないってことくらい恋愛経験皆無な僕でも分かる。

言わなければならぬことも、予想はついている。

でも、なんなんだろう、この状況。

そこかしこから視線を感じるんですけど……。

見覚えのある後頭部とか、聞き覚えのある声とか。あと見覚えのある前髪かきあげとか。いや、周囲に溶け込もうとしているのは分かるけれど、客の半分以上が同じようなことやってるド素人じゃ、さすがに気づくでしょ。あとイケメンは帰れよ。お前隠れる気ないだろ。

「えーくんえーくん。はい、あーん」

気づいていないのが、約一名いるけども。

木乃香さん自重してください。そんな期待した目を向けなくて

ださい。

後ろで、きゃー、とか言う声が聞こえたんだけど。イケメンの同類ですか。顔がいい人たちは中身が残念じゃなきゃいけないっていうルールでもあるんですか。

あー、帰りたい。

何が一番僕を帰りにくさせるのかっていうと、ダントツで、カウンターに座っている知り合いの自宅警備員だろう。コーヒー飲みながら新聞読んでいたはずなのに、気づいたらこっちに向かってサムズアップしてるし。自宅警備はどうしたんですか。偉い人に怒られても僕かばえませんかからね。

どうすんのこれ。衆人環境で「あーん」ですか。このフォークに巻き取られたナポリタンを食せと？

僕を悶殺させる気ですか。

ええい、もうどうにでもなれ！

アホウドリが鳴いている。

あほー、あほー、て。

おーいアホセンサー、仲間が呼んでるぞー。

……

燃え尽きたぜ……。

現在、僕と木乃香は公園のベンチとなりあつて座っている。時刻は夕方。

木乃香からの「あーん」攻撃が終わつたと思つたら、今度は「あーん」おねだり攻撃だつた。僕は死んだ。遺体は市中を引きづり回された拳句、こつやつてベンチさらしの刑に処せられている。

それに加えて、諭吉がまた一人僕の元から去つていった。この厳しい現代をともに生き抜いてきた戦友の彼だつたが、きつと僕にあきたのだと思う。でも彼は無口だから何も言わなかつた。僕と彼は友達だつたけど、ついぞ話すことはなかつた。

一体、今日だけで何人の男たちから爆死しろと願われたのだろうか。諭吉もそう願つたのだろうか。

僕はもう死んでいるというのに。
向ける場所のない彼らの不満が、僕一人の処刑で収まるはずがないのだ。むしろ今日のことでは燃え上がっただろう。そして魔法使いたちが麻帆良を変えるのだ。中世のレジスタンスのように。

ははは。

僕は歴史の礎となつた。

「なあえーくん」

「なんか僕が苗くんになつたみたい」

「そーやねー」

「……ごめんなさい」

謝るときはきちんと謝る。

それが男ってモノだろう。

「ごめんなさい無駄に恰好つけて。」

「……えーくん。ほらあれ、一番星や」

「うん」

「……なんや寒なつてきたなあ、えーくんは大丈夫？」

「うん」

「……」

「……」

なかなか本題に入れないのは、木乃香も僕も同じだ。

言わなければならぬことは決まっているはずなのに、最初の一言が口に出せない。

言うつてことは、認めるってことで。

それはこんなにも難しい。

「えーくんは」

「ん？」

「ウチのこと嫌い？」

「嫌いじゃないよ」

「好き？」

「嫌いじゃないよ」

「……えーくんのあほ」

ごめん、木乃香。

でもその言葉は僕が言うわけにはいかないんだ。
友達としての感情だったとしても、認めてしまえば線引きが狂って
しまう。優先順位をしつかり決めておかないと、最後にはすべて
失ってしまうから。

それに、伝えればそれは事実になって期待が生まれる。

木乃香が立っているところは危うい場所だから、いつだって味方
になってあげられるわけじゃない。裏切られるのは、初めから信賴
がないことよりもずっとつらいんだよ。

「ごめんね木乃香」

「どしたん？」

「……ごめんね」

木乃香から逃げて。

「なあえーくん」

苗くんなんて言わない。

木乃香がそれを望まないから。

「なんでお星様は光ってるんか知ってる？」

「そんなの」

燃えているから。

直線的な答えを返しそうになって、やめた。

そんな答えは全然恰好よくない。青春じゃない。

僕が答えあぐねて一分ほどして。

勢いをつけて木乃香がベンチから立ち上がる。スカートひらり、半周回って腕は後ろで組む。僕を覗き込む、にいつとした顔。頼上げて。初めて僕に見せてくれる一面。京美人っぽくない、どこにもいるような、ここにしかない笑顔の美少女。中学生らしい等身大の姿で、僕の前に立つ。

「時間切れや。えーくんは答えられなかったので宿題です。提出期限は分かるまでにしたるから、ちゃんと調べてウチに報告すること」

「……了解です。お姫様」

「じゃ、ウチはもう行くわ」

とてとて去っていくお姫様。

その足が、公園の出口の車止めがあるところで、とまる。

「ウチの名前の呼び方に注意やえー、二股えーくん」

「……………」

ポリウムに注意やえー、エセ天然このちゃん。

気づかない振りしていただけたのか、尾行クラスメイトに。

僕が二股男扱いされるって分かっていてこんだけ振り回すって、鬼ですか。可愛いですよもう。

「はあ」

宿題どうしよ。

女の子は時々、男の僕には理解不能になるのだ。

「なあ、あんたはどう思う」

「……………」

「答えなんて期待してなかったけどさ」

「……………」

「寂しいぜ」

僕たちの背後にずっと立っていた彼に尋ねても、やはりというか、答えは得られない。

顔色が青を通り越して黒くなりかかっているから仕方ないのかもしれない。

「最近調子はどうよ」

「……………」

「そっか。それは奇遇だね。僕もこの前炭酸のシャワーを浴びたばかりなんだ」

「……………」

「頭皮は心配ないよ。あんたらと違ってリアルタイムで補修されてくから」

「……………」

「……………」

「ねえママ。あのお兄ちゃん銅像さんとお話してるよ」
「見ちゃいけません」

さて、女子寮である。

そびえ立つ威容を見上げて首を痛くしたりはしない。今日はすでに三日目である。

三日目であるからこそ片付けねばならぬ問題もあるわけであり、今日は早めに潜入する心積もりだった。

この件について木乃香嬢を恨む気持ちは一切ないことをここに記しておく。

Q、ここってどこだよ。

A、女子寮の前です。

……まあいい。

現在地の地面に注意書きをしている暇はない。

今はとにかく女子寮への潜入が最優先任務である。

「アーヒール、不審者発見したよー。たすけてー」

「ちょ、サバサバ!？」

任務失敗。

サバサバによって女子寮の管理人室に突き出された僕は、管理人さんの前で正座をしている。

「で、キミには本当にやましい気持ちはなかったのかね」

「はい」

「ではなぜ、庭の植木に隠れて寮の中を窺っていたのかね」

「それは……」

「答えられないのかね」

「……僕には、青春の探求者としてのプライドがあるんです」

そう。僕は「青春を探そうの会」のメンバーなのだ。

女子寮を見たら忍び込まずにはいられない……ってわけじゃないんだけど。

マヒル先輩がアヒルに固執するように。サバサバがカップ麺に固執するように。二人には及ばないけれど、僕だって青春を求めている。

「さいばんちょー、被告人にいしやりょーを要求します」

「発言を許そう」

サバサバ、刑事裁判と民事裁判が混ざっちゃってるよ。

「おらー、このエロ餓鬼がー、新しいポット買ってくれないと泣くぞー」

それはちょっと買わざるをえないね。

「……と、いうことらしいが？」

「すみません裁判長。僕にはもう諭吉がいないんです。裁判長が僕につけている野口さんがたぶん十人くらいいると思うので、それでお支払いをお願いします」

「……………」

「飽きた。帰る」

サバサバが管理人室を去っていく。

残される僕と管理人さん。

「裁判長、自分の部屋を覗き込むのは罪になるのでしょうか」

「ならんだろうな」

「ですよー」

このネタは僕もちょっとどうかと思った。

管理人さんとサバサバに乘せられて、参加してみただ、使い古された感もあって微妙だ、というのが正直な感想。

日常の何もかもを、フィクションのように面白く彩りたいという青春依存症。

若気の至りとも、言えるかもしれない。

とにかくそんな現在進行な黒歴史。

「ところでエリイくん」

「何です、裁判長」

「昼間の女の子とはどこまでいったのかな？」

「ちよつと近所の公園まで」

「ただいまー、千雨」

「遅かったじゃん。テンコーセーくんはしっかり観察できた？」

「うん。アヒルと裁判ごっこもした」

「……鳥？」

003・苗くんと仲間な愉快たち（後書き）

木乃香のキャラも京都弁も分からない……。

これでいいんでしょうか？

違ったとしても作者の木乃香さんのイメージはこんな感じなんで、簡単には直せないんですが（汗

京都弁は指摘があればすぐに直します。

004・ユーミになった夜に

ここでひとつ、麻帆良全域を覆う結界について簡潔に説明しておこう。

結界の主な効果は二つ。

一般人に対する認識阻害。そして、外部からの侵入者の察知。

しかし、麻帆良のトップは大妖怪である。（サバサバ談）

つまり麻帆良はぬらりひよんの領土であることを考慮せねばならず、結界にもぬらりひよんによるぬらりひよん的な何かの仕掛けが施されているのかもしれない。（マヒル先輩談）。

確かにぬらりひよんは侮りがたしの称号を持つぬらりひよんなのでそれも納得である。キングスライム並みにすごい。

程度が分かりにくいと言っな。僕だって分からない。

「キミも大概失礼な人だね」

イケメン的な何かかイケメン的な何かを言っているが、僕はこれでもエアリーディング検定とスルースキル検定の有段者なので、ここは華麗に決める。

「あー今日も空が青いなー」

「星空すら見えないけどね」

辺りは真っ暗だが気にしない。

話を戻そう。ぬらりひよんがいくらぬらりひよんであったとしても、やることやってくれれば、下っ端の僕には関係ないことだ。だからこの際スルーする。僕はそれでもエアリー以下略スルー以下略。

ちなみにこのエア―以下略スルー以下略はマヒル先輩とサバサバが問題作成、実施を行なったローカルな大作なのだが、僕は以下略以下略なので以下略。つまり以下略。

以下略。

以下略。

以下略。

くどい。

つまり言いたいことがそれである。

麻帆良大結界のせいでツッコミ要員が過疎ってる。

僕の自虐からも分かるだろう。

分からない？

「それは残念」

「……何が？」

おっと。

「イケメンの顔が」

「……それって俺のあだ名、なんだよね」

イケメンなだけあって、僕が提唱したあだ名が広まるのは早かった。一週間で二十人弱は、かなりの成果と誇っていい数字のはずだ。さすがイケメン。名誉なあだ名のはずなのに彼が不満そうにしている理由が僕には分からない。

「もしかしてキングイケメンの方が良かった？」

「もっと悪いわ！」

違っらしい。

まあ誤魔化せたからいいや。

認識阻害のおかげでツツコミ要員が少ないという話。

具体的には、女子寮の階数が春休み中のうち三日間で一階増えていても、僕のクラスメイトの中でそのことに明確なツツコミの姿勢を示したのはひとりだけだったほど。

余談だが、彼女のフォローはルームメイトのサバサバが念入りに行なったらしい。

既存の建築物を上には伸ばすって、かなりすごいと思う。やばいとも思う。大丈夫なんだろうが、耐震強度的な意味で。それをカバーする技術力は僕のクラスメイトのT丸さんを見ていただければ、分かると思う。

部屋数に余裕が出来、そこに転入組の男子生徒たちを入れる。

こんなことをする学園長の意図が僕にはよく分からないけど、不自然さは結界のおかげで感じられず、それを感じ取ることのできる人間で学園長に意見できる人間はほとんどいない。

ちなみに僕は飛び入り参加だったため、部屋が用意できず、今年からマヒル先輩が住み込むことになった管理人室とその奥の扉から続く居住スペースに住まわせてもらっている。同棲と言うことなから。ルームシェアである。僕を転入組にねじこんだのはマヒル先輩だからそのくらいの責任は取ってもらわないと困る。

マヒル先輩が女子寮の管理人になっっていることについてはもう諦めるしかない。彼のシスコンぶりはすでに女子寮内に広まっているようで、妙な信頼をされている。新しく入ってきた転入組の男子たちよりよっぽど信用できるのだとか。

入寮三日目で荷解きを終えないまま女子校に入学を果たした僕は、五日目にしてようやく荷解きを終え、十日目の今日、麻帆良の森の中に立っている。

繰り返すようだが、麻帆良大結界にはふたつの機能がある。
認識阻害についての機能がひとつ。

もうひとつが、外部からの侵入者の察知。

麻帆良は関東魔法協会の本部で、トップもここにいます。となれば必然、東と不仲な西の過激派がやってくる。そうでなくたって、最新のものから大戦以前の貴重なものまで多数の書物を収めている図書館島があるため、それを狙いにやってくる身の程をわきまえないトレジャーハンターもいます。

そんな奴らを察知するのが結界の役目。
交戦し排除するのが、魔法先生や僕たち魔法生徒の役目だ。

関西呪術協会からの正式な指令書は確認済みだ。ボスからの手紙も来ていた。出張扱いにしてくれるらしい。ボスに感謝。

「この仕事が終わったら、B S Sの自販機探して缶コーヒー買うんだ」

「この仕事が終わったら、彼女と結婚するんだ」

……イケメンのくせに彼女とか（笑）。

「やっぱりそのあだ名悪口だよな!？」

「あれー？」

「しっかりと口に出てたから」

納得。

しかしこれには色々と深いわけがあるんだ。二人でわざわざ死亡フラグを立てるくらい深いわけが。

「せっかく乗ってあげたのにまともな反応しないし、変なあだ名は広めるし。この機会にキミには俺との接し方を、……語ってやる予定だったが、どうやらそうも言っていていられなくなったらしい」

「侵入者？」

「おそらく」

イケメンはコーミになって、ポケットから薄い板を取り出した。通信機だ。大きさ太さは最新式の携帯（麻帆良製）と同じくらい。でも通話のみに絞って機能を比較するなら、この見た目何の変哲もないただの黒い板が圧勝する。

発信機としての役割も果たす優れもの。

どこでも使える壊れない無線を指摘したものらしく、科学と魔法のどちらの方面からの妨害があっても、常に最高の音質で通話できると説明された。子機であるこの板からは親機にしか通信できないが、戦闘時の緊迫した状況での連絡を想定すると、発信の際に通信相手を選ぶ手間が掛からなくていいとのこと。

当番の者は各自必ずこの通信機を携帯することになっている。

「こちら神海、状況は？」

『そこから北西一キロの地点に侵入者です』

この通信機、必要がない限りは常にスピーカーモードになっているので会話の内容は僕にも聞こえる。

「応援は？」

『予想到着時刻は戦闘開始から十分です』
「了解」

通信を切り、通信機をしまっコーミ。

「行くぞ弾場。十分で終わらせる。足手纏いになるなよ」
「あいよー」

お前もな、なんて言わない。
なんかそれって青春っぽいから。

こんな戦闘の日常が僕の青春だなんて、最悪だよ。

えーくと神海のペアが敵と交戦中。
そんな通信をもらったのが十分ほど前。

本来、救援要請もないのに別の区域の担当ペアが援護に向かったりすることはない。しかし彼らは魔法生徒のみのペアの上、一年間一般生徒として生活をしていたえーくんの実力を疑問視する声も上がり、初回のみ、担当区域も近く、二人のクラスメイトであり、もしもの時に連携も取りやすいだろうということで（クラスメイトだから連携が取れるという論理が私にはいまいちよく分からないのだが）、私と龍宮のペアが様子を見に行くことになっている。

私としては、神海レイジの実力を疑わないで、えーくんの実力だけを疑うのはちょっと不満だ。「悠久の風」に所属しているからなんだっていうんだ。えーくんだって十年以上も神鳴流を修めているんだ。

「えーくんは顔がいいだけの男になんか負けない」

「いや、弾場と神海はペアだからな」

「えーくんは真面目ではなかったし、太刀筋もいまいちパツとしな
い人だったけど、ちゃんと私と一緒に修行もしたし、一緒に雑魚寝
したことだって……！」

「桜咲、途中からのろけになってる」

「……どこが？」

「ダメだこいつ」

私も龍宮もそれほど心配しているというわけでもなかったから、
そんな話をしながら森の中を走り、そして現場に到着。

「なあ龍宮」

「なんだい」

「私たちが来る必要は……」

「なかったと思うよ」

侵入者と思われる、身体に大きな光るネジが数本生えた男を拘束
する神海。その向こうで、残党である消えかけている鬼、こちらも
脇腹と肩からネジが生えているが、その鬼と交戦……ワンサイドゲ
ームをしているえーくん。

それが私たちの見た現状だった。

アレを使う必要すらなかった。

事前に聞いてはいたが、コーミの使う術（？）はかなり便利で、そして特異なもので、中空に光る巨大なネジを生み出し、自動追尾機能を持ったそれを相手に刺すというものだった。生み出したネジは、物理的な衝撃は発生させるが肉体を傷つけることはできないというワケの分からないもので、さらには刺された者の身体能力や魔力や気を神海と同じレベルまで下げるといふオプション付き。

学園長も言っていた通り、確かにこの術は西洋魔術などではない。日本固有の呪術にも相手の魔力や気を制限するというものがあるが、コーミの使う術ほどお手軽にはいかない。

イケメンは、不思議ちゃん属性を持ったイケメンだったらしい。うええ。

本人は、ぶつくめーかーかつこかいとか、神様から貰った能力だとかほざいていた。このことから彼が不思議ちゃんであることが窺える。

中身はどうあれ、便利な術なのは確かで、僕はコーミと同じレベルまで肉体が弱体化した鬼たちをばったばったと切り倒していくだけでよかった。

初めは偽装のため、ボスに引き抜かれてからは護身のためにたしなんでいる神鳴流だが、さすがに十年もやっていると実践に耐えるレベルにはなっているのだ。こんな敵を相手にヘマをしているようでは、後で応援に来ることになっている刹那に何をされるか分かったもんじやない。昔のように「修行だ特訓だ」とか無駄に情熱を燃やして剣術に打ち込むのは、ちときつい。

……最後になった鬼一体を還して、本部に通信を行なっているコーミのところに行く。

「はい、侵入者を無事拘束したので、回収のための人員をお願いします」

『その位置だと二十分ほど掛かりますのでそれまでその場で待機しててください』

「了解です」

通信を切り、ポケットに。

「おっつー、コーミ」

「おつかれ。……今は神海なのね」

「は？ だってコーミはコーミでしょ」

「それを教室で言っただけだった」

初任務が何事もなく終わったというのになぜかしょぼくれるコーミ。やはり彼の倒す分も鬼を残してあげるべきだったんだろうか。鬼との本気の殴りあいつてなかなか経験できないよね。あ、でも、あの術はコーミの術なんだから、コーミは鬼との殴り合いには慣れているのか。

「いや、せっかく自分の力に頼り切っている相手を弱体化したんだから近代武器使おうよ。拳銃とか」

「おー、そーか。コーミって気は一般人レベルだし魔力に至ってはほとんどゼロだから、銃が凶器に変身するわけだ」

「拳銃はもともと凶器だけだね。それと俺のネジを受けたわけでもないのに、気も魔力も俺とほとんど変わらないキミにそんなことを言われたくはない」

「あはは」

「……………」

「あはははー」

侵入者の男が無事回収され、再び森の中で二人、侵入者を待つ。

「そういえば、あの光るネジってどのくらい残り続けるの？」

「俺が消そうとしなければ一日くらい」

「……可哀想に。頭にネジが刺さった彼はフランケンというあだ名と一生付き合っていくことになるんだね」

「俺はお前の頭の中が可哀想だ」

「イケメンも同窓会とかで『あ、イケメン（笑）じゃん。ちよーウケるー』とか言われるんだよきつと」

「……………」

可哀想に。

004・ユーミになった夜に（後書き）

イケメンの能力は「めだかボックス」より。

作者は「めだかボックス」も知らない。けど「却本作り（ブックメーカー）」は知っている。ただし詳しく知っているわけじゃないので不自然な点を指摘されても修正できません。本作品に登場するのは「却本作り（改）」ですから。

005・サバイバルって辛いよね！。（前書き）

いろんな「ネギま！」の二次創作を見てきたけど、中二の時のキャンプの話を読んだことはない作者。

もしかしてキャンプはないって設定でもあるのでしょうか？

005・サバイバルって辛いよねー。

女子校生活といっても、所詮は周りの学友たちの性別が変わったというだけ。真新しさに心震わせるのは初めの一週間くらいで、それを過ぎてしまえばもう今までの男子校生活と差異はない。クラスからちよつと浮いてるっただけで。

まあ僕が浮くことによって誰かさんが学生生活を堪能できるのなら安いものだ。

非日常が日常になりつつあった四月下旬。

青春探求家の僕としては、そろそろ何かをしなきゃいけないなっと思ってはいたけど、その何かに明確なイメージがないってのが青春な由縁であるわけで。漠然とした不安はいつも胸の内に寄り添っていた。

そんな僕に朗報。

きっかけはクーフェだった。

「エリイ、ちよつといいアルカ？」

「アルアル」

クーフェは「古」に、なんかうねうねした文字を書いてクー・フエイって読むらしいけど、漢字が難しくてよく分からないアル。留学生で中国武術（？）の達人、中国系だと思うけど、本当のところはよく分からないアル。

「それはよかったアル」

「アルアル」

「ゴールデンウィークは、」

「あるアル」

「……………」

なにこの可愛い生物。

と思っただけ口には出さない。

だって僕は青春探求家ですから。

関係ないだろとか言わない。

なーんて脳内会議してたら、後ろからはたかれた。

「ちょっとエリィ、あんた何クーフエ泣かせてんのよ」

「そうやえ、えーくん。女の子いじめたらあかん」

丸めたノートで頭を叩いたのが神楽坂明日菜。通称バカレッド。
きちくのしぎょうやえー、と言いながら僕の脇腹を指でツンツンいじめているのが木乃香。木乃香と神楽坂はルームメイトで、よく一緒にいる姿を見かける。

ちなみに僕のエリィというあだ名は、イケメンがイケメンであるのには及ばないけど、サバサバを発端としてかなりの速度で広がった。でもえーくんの方は言わずもがな。刹那だけは僕のことを「えー弾場」って不思議な呼び方してるけど、接頭辞「えー」が表す意味を答えなさい。制限時間は十秒。配点は三点です。

解答？ 知らないよそんなの。

「私としましても今回の事件はまことに遺憾でありまして」

「ちゃんと謝りなさい」

足を踏まれた。神楽坂踏みつけたった。

「謝るときはきちんと謝る。それが男ってモノなんだぜ」

「で？」

「ごめんなさいクーフエさん僕が悪かったです泣かして悪かったです許してください」

「……泣いて、ないアルヨ」

上目遣い強がりクーフエ。

これやばい。

教室から出て行こうとしていたイケメンが爆発した。

僕は彼の死を無駄にしないためにも必死に耐えた。

木乃香と神楽坂は苦笑いしていた。

だからなおさら倒れるわけにはいかなかった。ここで倒れたら、僕たちが無能だということを証明しているようなものだ。僕たちは必死にこの青春時代で心のサバイバルを繰り返しているのに「男子ってバカよねー」の一言で済まされる屈辱を味わってなるものか。

「ほんとアルヨ？」

無駄な抵抗だった。

どうする？

たたかう

どうぐ

こうたい

にげる

いけめん は しんでいて こうたいできない
どうする？

たたかう

どうぐ

こうたい

にげる

ほんとうに にげますか？

YES

NO

のろわれていて にげられない
くーふえ の こうげき！
えりいは しんだ

しんでしまうとは なにごとだ

仕方ないんです先生。
それが男ってモノなんだぜ。

世の中って綺麗なことばかりじゃない。
イケメンだってトイレに行かなきゃいけないし、僕だってそうだ。
そんなわけで転入組の男子生徒たちは職員室の隣にある職員用男
子トイレを使っている。先生なのに男子なところに突っ込んではい

けない。正式には男性用トイレとでも言うのだろうか。

死んでしまった僕を教会で復活させてくれるような誠実な神父さんは麻帆良にはいないので、男子トイレにてよみがえらせてもらった。これも「くーふえののろい」が、死ねば自動的に解除される良心的な設計だったおかげだろう。

僕は掃除道具入れにあったモップを装備し、再び魔王と相対するため旅に出た、なんてことはない。

廊下はもう夕暮れに染まっていた。

教室の前に着くと、ちょうどサバサバが出てきた。いまだ入口付近で倒れているイケメンのことは完璧スルーだった。

愛の反対は無関心。

「脳みそリストラするべき」

僕はイケメンに勝った。むなしさが残った。

「僕はお前らを捨てたりなんかしない！」

「……………」

「もしかして、リストラクション再構築って言いたかった？」

さばさば は にげだした

今日授業でやったもんね。restruction＝再構築って。授業内容を自分のものにしようとするその姿勢は高評価だと思うよ。

教室に入る際にさりげなくイケメンを踏みつけて（愛の反対は無関心だ）、何事かを話し合っているクーフェ、木乃香、神楽坂と忍

者のもとへ戻った。いつの間にか一人増えている。

「エリイ殿、無事だったでござるか」

「ちよつと神殿^{トイレ}で復活してきた」

「重畳でござる」

神楽坂が丸めたノートを持った手をふるふるさせていたけど、なんだったんだろう。

がたん、とイスを鳴らしてクーフェが立ち上がった。

「私、大人になるアル！」

そのセリフはバカレンジャーを卒業してから言つべきだと思う。

がたん。今度は神楽坂だった。

肅々と僕の方に歩いてくると、にっこりと笑った。神楽坂踏みつけた。さすがバカレンジャーなだけある。敵認定された奴らは容赦なく殺すヒーローモノの残酷さを兼ね備えている。

「エリイ、サバサバをかけて私と勝負アル！」

さっきの一幕は流すらしい。

「……そもそもこの国の憲法にはどんな人間でも皆等しく同じ人間だという記述があつてだな」

「まさかエリイが真面目に返してくるとは予想外だったアル」

「失礼な。僕だって真面目にやることくらいアル」

「やっぱり真面目じゃなかったアル」

がたん。神楽坂だった。神楽坂踏みつけたった。

「木乃香、僕にはよく分からないんだけど、なぜかさっきから足が痛むんだ」

「奇遇やなー。ウチにもよう分からん」

「神楽坂さん、僕にはよく」

「死人に口なしよ」

……

……

「明日菜はなー、きつと『罪人にはあれこれ文句言う権利ない』と言おうとしたんやってウチは思うんよ。明日菜は悪くないんや。理解してあげれんかったウチらにこそ責任が」

「やめて木乃香、惨めになるだけだから」

「話が全然進まないアルー」

困り顔クーフエ。

「エリイ殿！」

今度のチャレンジャーは忍者だった。

「3-Aの有志で、今度のゴールデンウィーク中にサバイバルキャンプを開くことにしたのでござるが、エリイ殿は参加いたすか？」
「もち」

攻略終了。

エリイ城は陥落しました。

……

……

「ちなみになー、『大人になる』いうんは『大人の狡猾さを獲得する』という意味で使ったんや。真面目に話を聞いてくれないえーくんもサバちゃんが絡めば話を聞いてくれるかなって思ったらしいんよ。それで『狡猾さ』や。でもそのまま使うのはひねりがないからゆーて、『大人になる』って言ったんやって」

「へー、クーフエの言葉にはそんな深い意味が」

「あんたたちはそれをわざとやってるから性質たちが悪いのよ……」

「何のことや、明日菜？」

「もういいわよ」

この日、夕暮れの教室で物憂げにため息をつくバカレツドの貴重な姿が目撃されたとか。

なぜサバイバルキャンプなんてものを開催することにしたのか。まずはそこから説明するべきだろう。

忘れている方も多いと思う。中学二年といえば、日本の学生のほとんどが経験するあの重大なイベントが開催される年である。そう。

キャンプ。青春時代を生きる僕たち中学二年生にとって忘れようにも忘れられない出来事になるだろう学校行事。そのための練習がサバイバルキャンプver.2-A。

ところで、麻帆良学園女子中等部のキャンプは五月中旬に行なわれる。

お祭り大好き2-Aの面々が、このイベントを忘れるはずもない。(ゴールドenウィーク明け、キャンプの直前に行なわれる中間テストについては、眼中にない生徒が多いように思われるが…)

とにかく、キャンプである。

そしてこの麻帆良流キャンプ、さすが麻帆良と形容すべきことが一点。

リアルキャンプであるということ。

一般的な中学二年生が経験するような生ぬるいキャンプではない。僕らを優しく包み込んでくれる母なる大地、大自然を味わうなんて機会じゃない。味わうのは自然の冷たさ、僕らへの無関心さ。

生きるということを学ぶ。

それが厳しくも優しい麻帆良流サバイバルキャンプだ。

なーんて恰好つけてみたけど、要するに毛布とテント渡すから、あとは勝手に生活しろという企画。

食料の持ち込みは可だし、調理器具も可。おやつのは価格制限もない。

むしろそこらへんに生えてる草とかキノコとか果物っぱいものとかを食べたい場合は、キャンプに同行している専門のインストラクターの許可を得なければならぬ。

中学生のキャンプなんてそんなもんです。

大抵の学生たちがスタート地点近くでテントを張って、あとは駄弁って終わり。

……でも、2-Aの奴らがそんなことで終わるはずがない。きつと「ジャングルの奥地の未開地域を探検だー」とか言って、無駄に頑張ってしまうに違いない。

日本にジャングルはないとかツツコミ入れる奴は、青春的に負けている。

いいじゃないか、ジャングルじゃなくても。未開じゃなくても。大事なのは楽しみたいって気持ち。だってこの時間は人生に一度しかないものだから。バカみたいでも、アホなことしか起こらない日常でも、僕は楽しんで過ごしたい。だって僕は青春探求家だ。こんな恥ずかしい肩書き、バカじゃなかったら名乗れないだろ？

ガラになく熱く語ってしまったあの時の自分を回想するとちよつと死にたくなる今日この頃。でも僕は自重しない。こんなことで死ぬくらいなら初めから青春を求めたりなんかしない。

なんてことを思った自分に死にたくなるっていう無限ループ。

青春って青いなー。

ところで今朝は生憎の曇り空だったけど、だんだん晴れてきたね。この調子なら夜には星が見えるんじゃないかな。

聞いてない？ ですよー。

でも僕は思っただよ。なんで同じ寮に住んでいるのに現地集合にするのかなって。だって同じトコに住んでるんだよ。わざわざ同じ場所から出て、同じ待ち合わせ場所で無意味に時間潰すくらいなら、みんなで一緒に行けばよくない？

確かに集団で移動するっていうのは迷惑になりやすいんだけどさ。分かってるよ。うん。分かってる。

でもそれに納得できるかって別だよ。

中学校で集団登校しない理由を持ち出されると、僕としてはちょっと反論が思いつかないんだけどさ。

例えばさ、デートの時に約束の三十分前から待ち合わせ場所で待っているとよく言うじゃん。そこで相手を待ちたいって気持ち。あれは理解できるんだよ。

でもこれデートじゃないじゃん。本番のキャンプのための練習だよ。本番でスタミナ切れ起こさないためにも、ここはいつものペースで通過すべき場所だと思うんだよ、僕は。

「ちょっとエリイ」

「ん？」

「あれ」

神楽坂に声をかけられた。彼女が指さした場所に目を向けると、僕を見て震える二人の女子生徒の姿。

ぶっちゃけ、綾瀬夕映と宮崎のどかだった。

「ゆ、ゆえ」

「大丈夫ですのどか。お化けは昼間に活動できないと聞きます」

「でも、それならエリイくんは誰と」

「あの人はちょっと頭がアレな人なので仕方ないのです。あれは独り言です。私が保証するから安心します」

「よ、よかったあ」

あれえー？

「うわ。なんかこっち来たです」

「どどど、どうしよう、ゆえ」

「逃げるが勝ちです。行くのですのか」

「ま、待ってよ」

……

……

「自業自得よ。慰めないからね」

「じー」

「な、なによ？」

魂の抜けたような瞳で見つめていると、神楽坂はたじろいだ。

「じー」

面白いので続ける。

「じー」

「こ、今回は間違っていないはずよ」

「本当に？」

何のことが分からないが取りあえず、神楽坂に合わせておく。

「えー！？ だって自業自得ってそういう意味じゃ……。もしかして

違うの！？ や、どうしよ、え、でも間違っていないはず」
「……本当に？」

何のことか分かったが取りあえず、神楽坂に合わせておく。

「もしかして自問自答。いやそれはないわよね？ でももしかしたら……。あーわかんなくなってきた。自画自賛？」

「自由の女神」
「それはない」

ぶつぶつ悩んでいるところにせっかくヒントを与えてあげたのに、即座に切り捨てられた。

「……自業自得で合ってるよ」
「よかったー」

胸を撫で下ろす神楽坂。

その笑顔が……。その、心拍数に影響大です。
と思っていたら、すぐにこちらをじとーって睨んでくる神楽坂。
名残惜しいなんて思っていない、はず。

「じゃあなんで」

私のことをあんな目で見っていたの？

「なんでかなーと」
「何が」

意味もなくはぐらかそうとしてみたけど、やっぱり意味はなかった。

「いや、綾瀬たちは僕のこと怖がってたのに、なんで神楽坂は……
って」

「さあ？」

分からないのかよ、自分のことなのに。

「そんな目されたって知らないわよ」

「じー」

「……私はあんたみたいなアレな人でも受け入れてあげる心の広い
女なの！」

「うわー」

「なんでそんな目で見るのよ！？ あんたが言えっていうから私は」

「このちゃんチョーップ」

神楽坂が暴走し始めたところで、木乃香の助け舟が後頭部に直撃。
僕は座礁した。ヒーロー漫画の敵の怪人が倒れる感じで地面に伏す。
ぐへえ。

「たったいま神楽坂明日菜一人仕入れたえー。誰かー、出来立てほ
やはやの明日菜はいらんかえー？ 安くしとくえー」

「ちよ、ちよつと木乃香！」

ナイス木乃香。そのまま神楽坂を引きずっていつてくれ。

「だいじょーぶ？」

よく分からない何かに敗北した僕を心配してくれる女の子、サバ
サバ。

でもね、サバサバ。僕の手を踏んでたら、全部台無しだよ。

集合時間五分前、十四時五十五分。

こういうときは無駄に行動力がある2-A。
遅刻者なく、全員集合完了。

「みなさん、これで全員そろいましたわね」
『おー』

合唱。やっぱりこういうときは揃わないとね。

「それではここからはクラス委員長である私、雪広が引率を務めさせていただきますわ」

引率って言うても目の前の建物に入るだけなんだけどね。

『キャンプの大山』

文字通り大山さんが店長を務めている（未確認情報）キャンプ用品の専門店だ。キャンプ用品専門って採算取れるんだろうか、という疑問は抱いちゃいけない。それが麻帆良クオリティ。

しかしこの大山、ただの大きいだけの山となめちゃいけない。なんと、大山はキャンプ体験ができる大山なのだ。キャンプ大山はキャンプ用品の専門店であると同時に、店の背後にある、店長直々に

切り開いた（未確認情報）麻帆良の森林地帯を用いてキャンプ体験まで出来てしまうという採算度外視の店なのだ。

田舎へ行くとたまに見かけるキャンプ体験ができる旅館の、店舗バージョンである。でもあれは土地代が安いから商売として成り立つのであつて麻帆良で同じことをやっても利益が出るとは思えないが、麻帆良の人たちの性質ゆえか、潰れずにやっているみたい。考えてみれば、僕たちが、その「麻帆良の人たち」の筆頭なのだろう。

普通の中学生はキャンプがあるからといって、休日潰してまで予習（？）をしようとは思わない。

とにかく。

そんな『キャンプの大山』に僕たちは来ていた。

いいんちよさんを先頭に、みんなでキャンプ用品が所狭しと並ぶ店内を通り、店の裏口を抜ける。するとそこには草の一本も生えていない過酷さを体現したような大地が広がっていた、なんてことはない。草抜き・除草剤散布を怠った小学校の校庭くらいのものだろうか。広さもそのくらい（麻帆良基準にあらず）。サバイバルな要素がゼロだ。

期待していたメンツには悪いが本番のキャンプの練習なんだから、安全安心設計じゃないと。ちゃんと森の奥のほうに行けないようにフェンスも張り巡らされているみたいだし。及第点かな、と専門家気取りで評価してみたり。

「では、みなさん。ここからは自由行動となりますが」

うんぬん。

いいんちよさんが細かく注意事項を説明してるけど、聞いている奴なんてほとんどいない。話す内容とかしっかり考えてきたんだろ

うな。みんなが揃うまでカンペで最終確認してるみたいだったし。
御愁傷さま。

「何か困ったことがあれば、私か、こちらにいらっしゃる副店長の
北村さんに声をかけてください。北村さんは」

眼鏡を掛けた若い優男が手を振っていた。

いいんちよさんの話によると、北村さんは大学時代は登山部に所属
していてキャンプの経験も豊富なんだとか。ぱっと見た感じそう
は見えないけど、筋肉のつき方とか、やっぱりそっち系の人だ。着
やせするタイプなのか。

「これで一通りの説明は終わりですが、何かご質問のある方は」

「いいんちよさん」

挙手する。ここは是非、質問せねばならぬことがある。

「何です弾場さん」

「店長の大山さんはどちらに」

「……店長の羽山さんは、今日は休暇を取られて、家族サービスに
いそしまれていらっしゃいます」

おしい。山違いか。

「おしくない」

隣にいたサバサバに突っ込まれた。

内容がどうかよりも、まずその事実が、なんというか色々ダメ
だった。

僕のおいしくもない質問はそれきりでスルーされ、北村さんが短い挨拶を一言して、解散となった。

ここからは各自、夕食のカレーを作り始めるまでの二時間の自由行動。

無料貸し出しされているテントを組み立ててみるもよし。その中で昼寝するもよし。『キャンプの大山』店内に置いてある、野草やキノコについての本を読んで知識を深めるもよし。キャンプとの関係性は理解不能だが、ボール遊びをするもよし。修行するもよし。

……お前ら何しに来たんだ？

とりあえず僕は一人用テントと二人用テントの二種を組み立てては片付けてを一时间繰り返すという変人タイムを経て、二種のテントのエキスパートになった。

何がしたかったんだろう。

反省中という紙を背中に張られている僕は、残りの一時間を筋トレに費やした。さっきの一幕は自分でも悪かったと思ってる。でも二度とやらないという保証はできかねます。

で、カレー作りの時間がやってきて。

『反省中』な僕はひとりで正座。これはつらい。

ついさつき木乃香が僕のところに来て言ったのだ。「えーくん、最近ちよっと調子に乗りすぎ」って。思い当たる節がないわけでもない。回想してみるとむしろ調子に乗ってたシーンしか思い浮かべられない。なんということだ。

それに加えて今日は木乃香にフォロー入れてもらってしまった。つまり自分の尻拭いすらできていない。

そんなわけで改めて深く反省した僕は、わいわいきゃっきやな光景を前に正座で耐えている。今回はほんと反省しました。はい。

でも、これってある意味で褒美なのかも。

別に変態的な性癖に目覚めてしまったわけじゃないことを先に言っておく。

だって僕の前では花の女子中学生たちが楽しそうにカレーを作っている。火が上手くつかないとか、野菜つてどのくらいに切るのだとか、ルーって何個入れるのとか。騒ぎながら楽しそうに作ってる。イケメンは『悠久の風』の仕事があるみたいで、このイベントには参加できなかった。相当悔しがっていたっけ。

だから、こんなに楽しそうな2・Aの面々の姿を見ることができないのは僕だけの特権。

他のどんな同級生も味わえない、僕だけの。

もちろん僕だってあの中に入っていきたい欲求がないわけじゃない。

けど、実際に自分がああの空間に馴染んでいる姿を想像すると、それもうかなくて思う。これは僕が青春を追い求める理由にも直結していて、あんまり上手くは説明できない。

星が瞬き始めた空と、その下で火を囲む女の子たちをぼんやりと見ていた僕のもとにひとりの女の子がやってくる。

サバサバだった。

彼女はこういうとき、いつも僕のそばにいてくれる。

僕が望んだ時にはいつだってサバサバは僕のそばにやってきてくれて、そのことにすこしだけ、どきりとする。彼女がどうしてこんなに鋭いのか、僕は知っている。彼女の苦しみ的一端も。

そして、だからこそ、彼女は僕の数少ない理解者、おそらくたったひとりの理解者で。

「たのしめる?」

「楽しめてる、と、いいなあ」

こうやって僕たちは一緒にいる。
これが正しいことなのかすら、分からないまま。

「えーくんえーくん。はい、あーん」

「あの、木乃香さん」

「あーん」

「これ、ルーの色が……」

「あーん」

罰ゲーム、なんだろうな。

せめて幸せに死にたかったぜ。ちくしょう……。

……
……

ゴールデンウィーク明け、麻帆良新聞の隅っこに『彼女の料理を
食べて悶死した男』の姿を収めた写真が掲載されたとか。

005・サバイバルって辛いよねー。（後書き）

タイトルには二重の意味があった。そんな第五話でしたー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2165y/>

Blue;HEAd

2011年11月20日12時58分発行